



第 3 2 号
平成十年
(1998)
7月15日発行
(年4回発行)

悼一穂庵宗匠

東 明雅

猫叢会の顧問であった中島啓世さんが四月二十二日逝去された。享年八十五歳。
神戸生まれ、十歳の時芦屋に転居。神戸女学院卒。俳句を山口誓子の愛弟子として三十五年間、連句は柿衛岡田利兵衛先生の講義を受けておられたが、昭和五十三年の夏、当時松本市に住んでいた私を訪問され、それより実作に入られ、昭和五十六年A・C・Cの一期生として入会、その後、猫叢会員から同人となられ、会の顧問となり、平成七年五月立机を許され、一穂庵啓世として、主として湘南地方の連句興隆に尽力された。

談致した事もあったが、その都度、理をつくした正しい判断とご意見を伺う事が出来た。それも関西アクセントのやわらかな口調であるだけに、一層説得力があつて、私は何かやさしい実の姉の言葉を聞くような感じがして、本当に便りにしていたのである。
六月七日、深川連句教室では杉内徒司氏の発議で一穂庵宗匠の追悼俳諧を興行する事になり、四席全部、歌仙を首尾した。左に掲げるのは、その中の一卷である。

佛の牡丹

一穂庵啓世宗匠追悼 膝送り歌仙

佛の牡丹遺して逝かれけり 明雅
涼しき声のいまも耳奥 路子
バラライカ民族衣装着こなして 千恵子
カメラとフィルムトランクの中 守男
金泥を湖西に流す望の月 路
舟で頬ばる新米の味 雅
秋祭笛や太鼓に誘はれて 千
恋する時はいつも初恋 男
男嫌ひは表看板巴里娘 雅
環境ホルモン乱す神経 路
ニュートリノ質量ありと新説に 千
月を仰いで冬期講習 男
一茶忌の一日物を探しをり 路
鼠怖がるマンションの猫 雅
ごみだしは種類を分けて家毎に 男
ぐーちょよきはあをくりかへす子ら 千

夢殿を出てみそなはせ花大樹
亀を鳴かせて軽くいっぱい
体脂肪すこし気になる暮の春
祖母の部屋から鯨尺でる
まんづまんづねまりなされや囲炉裏端
なめとこ山の熊を訪ねて
休日はテレビ紀行を楽しみに
W杯を一族で見る
疾風の如き野人に首ったけ
何かセクシー浅黒き肌
告白をぬらりんひょんとかはす月
案山子へむけてためし打ちする
さて網に皆で追ひ込む秋の鮒
傘齡の友今もモッコス
貫ひ湯は大き盥の日向水
波紋のやうに蝉時雨増す
掘出す卑彌乎の鏡二十枚
種蒔く人の行きつ戻りつ
パステルの淡き色彩花朧
囀りを背に象徴詩詠む
平成十年六月七日 於江東区芭蕉記念館

* 追悼俳諧。故人の冥福を祈って、年忌などに催す連句興行。百箇日までを追悼といい、一周忌以上に及ぶ時は懐旧という。作品の中に落ちる・迷ふ・地獄・鬼・犬・もゆる・苦しむ・悲しむなどの語を嫌い、発句釈教ならば脳も釈教であるが、第三以後は普通の連句の按配でよく、恋句も必ず入れる。

橋間石提唱「非懐紙連句」について

渋谷 道

昭和二十六年五月に発行された橋間石句集『雪』は、俳句、連句、随想の三部より成る。その連句の部では、百韻一卷および歌仙二巻と並んで「新形式」と題する作品が三巻収められている。間石はそこで新形式に就いての考えを述べている。その内容を要約すると、

―百韻に始まった連句が略式の歌仙に移り、そのあと様々の形式が試みられたもののやはり歌仙が最も好まれていて、しかもどの形式も懐紙形式を基盤とすることに変わりはない。作品の展開に「波動の美を与える上から」大体系破急の調子にのるのはよいとして、「折」からくる規約の墨守の意味は今日すでに失いつつあるし、その長さも自分の長年の経験から現代は一卷二十句内外が適当と考える―

―伝統を尊ぶことにかけては人後に落ちぬ自分は、徒らに伝統破壊を企てるものではないし、「中世以来詩神にも近い存在」となった月花の意義は認めるとしても、今日それほどに尊ぶ必要があるだろうか。と、時には月花に関する便法がすでに行われてきた例を挙げて、月という文字のみの形骸に執着してゐることを述べ、一卷中に四季宗教恋愛のすべてを備えることに必ずしも執する要はなく、ひたすら格に入って格を出ようとすると全く新

しい企ての始まりであることを、力説しているのである。そして掲げられた三巻の作品は、当時の私には非常に新鮮なものとして強く印象づけられたことが忘れられない。

銀河濃し岩波新書得て帰る 間石
白磁の皿のうすばかげろふ 千遊
ではじまる対吟十八句。そしてまた、

沼暗き方へ分るる徑白く

命こめたる木彫観音

まどろみの覺めて露けき草雲雀

列仙傳をめくる秋風

椎茸を干しひろげたる竹の縁

土におろせし鶏のあしなへ

間石

湖白

石

逸郎

白

石

といったのびやかな渡りを含む三吟二十四句。

これらの作品では、付句の連鎖のありよう、そのこまやかさ、連衆の氣息が自然に伝わる連句文芸の精髓を、読み手が享受できる香気をそなえている。百韻から五十韻、そして歌仙が半歌仙へと、次第に短くなったのは時代の要求だといえよう。短いものほど韻律に富み、内容が濃密になるのは、詩や随筆に於ても言えることである。

短くなった新形式すなわち「非懐紙」は句数が十八句であっても半歌仙とは全く異なるものである。懐紙形式をとり払ったのであるから、「折」はなく、従って表も裏もない。

元来書き物は木や竹の札、或いはパピルスや羊皮紙に書かれたものを巻き、札は糸で連ねて巻いて持ち運んだ。それを卷子とよんだ。それが時代と共に複数を重ねて綴じて冊子となったのである。「冊」という字は札を紐でつらねた姿を表わす象形文字である。懐紙形式はまさしく冊子だから、解いて一枚の巻物にしたものは「懐紙に非ず」、つまり原始形態に戻そうではないか、とのころもちも籠っている。

「折」がなく、表も裏もなければ月花の定座はない。このあたりで月を出したい、花が欲しいとあれば出せばよし、花は桜でなくてもよい。差し合ひ、去嫌、自他場のことも、あくまで作者の常識的な配慮と詩的感性による判断にゆだねるしかない（これが難しいのであるが）。

発句の季に対して脇句は同季で受けるのは当然である。しかし第三を用言止めにこだわらなければならない。夏冬の扱いに春秋を優先する必要はなく、成りゆきで夏三句、春一句になっても全体としての季節の変化、「展開に波動の美」がそなわれればよいではないか。というのが橋間石の提唱である。但しこれは歌仙形式のすべてを熟知し多くの場を累ねて経験を積むことが不可欠と、繰返し説かれた。私にとつて非懐紙は自らの感性と表現力を問われる美しくもきびしい牙城なのである。

（「紫薇の会」主宰）

啓世さんとの長い年月

内田 麻子

ただ、感謝

八代 嬭

岩井啓子さんへ

橘 文子

昭和五六年の四月、朝日カルチャーセンターに明雅先生の連句教室が開かれ、新しい勉強にわくわくしながら集まった生徒達、勿論私にとって皆初対面の仲間でした。何時とはなしにその中で啓世さんと篤子さんと私が行動を共にするようになり、先ず啓世さんの当時上野毛のお宅でお月見の連句を巻いたりしたのが、座を作ったはじめてでしょうか。それ以来十七年、猫藪の同級生として、数々の旅行、伝導の書、立机、と体験を共に過ごして参りました。思い出は尽きませんが、中でも何回目かの新庄行では、熊谷氏の斡旋で鮭川村の温泉に泊り、こちら女性四人にあちら男性四人、先ずは連句を巻き、そのあと歌をうたい、ゲームをして、その音頭とりが啓世さん、彼女の才気あふれるリードで一同すっかりくつろぎ、お腹をかかえて笑いあった夜が忘れられません。今年に入って、私が外科手術で入院、彼女は何かと心配してくださいましたのに、私が退院の頃は、何か大変らしいと思いつながら、お元気な電話のお声にこちらが励まされて、遂にお伺いも出来ない内に悲しいお知らせを聞き、残念でたまりません。

中島啓世さんには大変お世話になりました。ご主人と私の父は海軍で同期であり、家も近く家族ぐるみのお付き合いでした。ご主人が戦死されてからは、幼いお子様達を抱えて大層ご苦労なされた事等を母から聞いています。平成四年四月、私が明雅先生の教室に入会したい旨をお伝えすると、早速連句辞典や季刊連句その他こまごまと資料を郵送していただきました。更に恐縮したことには、一度お会いしておきましょう、ついでがありますからと、鶴沼のお宅から私の住む八王子までの遠路をいらしたのです。正に、至れり尽くせり。初対面の私の入会を、こんなにも喜んで下さるのです。

啓世さん
もうあなたに会えないなんて、とても信じられません。あなたは今、旅に出ているのでしょうか？ 白夜の国の森の奥や、湖や、フィヨルドの海で遊んでいるのかしら。そして、薄水色のペーパーに、懐かしいペン字の便りを下さるでしょう。

妖精と舞ふや白夜の森深く
それから、ひょっこり「ただいま」と、美しい笑顔を見せてくれるに違いない。私はそう信じたいのです。だって、退院したら暫くは仕事を忘れ、思い切り連句が出来る、鹿教湯のむささびの宿、野沢の萱葺の宿、雪降る佐渡、陶磁の韓国など、旅と連句を楽しもうと約束していたのですもの。

平成五年に、ACCの同期生で四佳の会が生まれました。あなたは一番若いメンバーで、文字通り若々しい言葉のセンス、斬新な発句、個性的な捌きで、いつも素敵な座を作って下さいました。あなたのセッティングでの、薔薇咲く古庭園の同人会も楽しい思い出です。

忘れ得ず去年の館の白き薔薇 路子
四佳の会は、三人になってしまいました、やっぱり四匹の四佳猫の会です。
くちなしの香まとひて笑みたまふ

挽歌あの一とが居ない明るき笑顔と声残し
若葉萌え立つ此の世離れて

正式俳諧執筆を終えて

大窪 瑞枝

この四月二十六日の藤祭正式俳諧興行をもって平成九年度執筆を無事終了させて頂いた。ひとえに東明雅先生ご夫妻、桃径庵和子宗匠のご指導、ならびに猫養会の皆様方のご協力の賜物と厚く御礼申し上げます。

正式俳諧という儀式については何度か拝見して、よく判らないが何か意義あるものであるらしいとは感じていたが、私のようなACC卒業もそこに、後はただ遊ばせて頂いているだけの連句野次馬人口には関係のないことだと思っていた。お引き受けしてもいいのかどうか先輩のアドバイスなど何ううちにかなりそら恐ろしい現実がはつきりして来たが、そうなるかと辞退する方がなお気重のようにもなり、生来の物見高さと大きっぱな何とかなるさ氣質に自分を乗せてまかり出る太郎冠者となった次第である。

お茶お花の素養ゼロ。書道ゼロ以下。仕事から和服を着て長いこと正座の出来るのが取り柄といえそうだが、きょうび稽古は洋服だし、舞台では幕から幕まで坐ったきり。立ち歩きもお辞儀もしたことはないのである。正式俳諧は確かに何度か見ているのに、身につまされぬものには実は何も見えてはいず、マニュアル片手に先輩のビデオをリピートし

ては嘆息を新たにすると夏であった。

上の空であったものを、しかと意識的に確認しようなどと伝法院の青時雨忌に行き、合気道の有段者という女性の男着付けのまことに颯爽とした執筆ぶりに目を見張ったり、また令名高い先輩梓庵哲宗匠のテープの吟声をつぶさに拝聴、正に邦楽の語りの基本に則ったものであることに我が意を得たものである。ひとつの儀式がいかにかくさんの伝統文化の要素で成り立っていることか。この歳になつてこんなにも勉強の機会を浴びせかけられるとは何とも有り難い事であったと思う。

但しその苦勞が当日の執筆ぶりに実を結んだかという話は別で、和服や正座は苦でなくとも、歌膝は使う筋肉が違うから容赦なく足は釣ってくるし、袴はばさけるし、満座で転んで文台をひっくりかえさなかっただけを取り柄にめでたく終わらせて頂いた。

その後猫養会に於ける正式俳諧執筆はどうも古株の宗匠資格インシエーションのごときものであるらしいと悟ったが、それとは離れて、もっと若くて体力もありすっきりした年齢の方々に執筆の機会を与えてどんどん勉強して頂いた方が将来性もあるし儀式としても美しいものになるのではないか、というのが私の個人的感想である。

ビデオでも撮らなかつたかと聞かれたが文台去れば即ち反古ならぬ、正式終われば即風塵やるまいぞ、やるまいぞ。

花司役を終えて

八角 澄子

或る程度年齢を重ねた者が何か頼まれた時、あれもこれも嫌とすぐお断りするのには優雅ではないと感じていた或る日、式田様から正式俳諧での花司役をどうかと囁かれた。結局無駄な抵抗もしいでお受けしてしまえば後悔したがあとの祭であった。

さて、わが猫養会の春の正式俳諧の花は、牡丹か芍薬を活けることに決っている。正式俳諧に相応しい格の高い花という事である。

前に花司をなさった梅田利子さんの話。「春の正式の花は大変よ。その日の気温が高いとあつという間に咲くので押えるのに苦労する」。私は四月二十六日の本番前に一度は練習してみようと、花屋ウォッチングー大店舗から老舗まで探したが、ようやく手に入れたのは十日前だった。本番すれすれの二日前には鮮度や姿の良い蕾の大きさも自由に選べる花々が出回った。私は紫がかったピンクの芍薬を選んだが、この花の揚水力は実に旺盛でもっと固い蕾を余分に用意すればよかった。最近、瀧川雅代さんと電話でお話する機会があり、花司役の時には牡丹を一鉢買われ直前にカットされたと聞いた。他にも冷蔵庫で保管された方もあるとか。何も知らず、悲鳴をあげていたのは私だけだったのだ。

第十二回 亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧

次第 役割

一	席改め	宗匠	坂本 孝子
二	席入り	脇宗匠	市野沢弘子
三	配硯	執筆	大窪 瑞枝
四	献花	執筆	近藤 守男
五	執筆呼び出し	知司	倉本 路子
六	文台捌き	副知司	浅賀 淑代
七	俳諧興行	同	吉村 友みこ
八	花前	座配	座見 小野 シズ
九	玉串奉奠	座配	花司 八角 澄子
十	花の匂披露	座配	配硯 椿 紀子
十一	端作り	同	同 加藤 道子
十二	吟声	同	同 松本 碧
十三	文台返し	老長	中田 あかり
十四	作品奉納		
十五	納硯		
十六	挨拶		
十七	退席		

平成十年四月二十六日
於 江東区亀戸天神社

藤祭り奉納俳諧興行

脇起二十韻「藤祭り」

奉る連歌百巻藤祭り	明雅
反橋を踏む亀の鳴く頃	弘子
キャンプリン遠近の嶺笑ふらん	守男
銀紙少しチョコレートつけ	淑代
宿直の窓は細めに仰ぐ月	ふみこ
日展に入る妻の肖像	シズ
いちじくよなんでアダムに臍がある	路子
ひねもす雨の降り続く庭	澄子
創業は嘉永の暖簾下ろしけり	紀子
万金丹を旅に携へ	あかり
酌み交はず深紅のワイン夏館	道子
室内プール水を吐く獅子	碧
醜男の滾る想ひを告げも得で	美奈子
衣片敷き寝ぬる尼君	政治
月芽えて響くは何処早鼓	志乃
制裁決議イラク凍てつく	悟乃
病床に企業戦士の夢は覚め	蘭石
鳥籠覗きあやす初孫	鶴鳴
鯛の尾は絵皿に余り花吹雪	孝子
暦通りに浸す種粉	執筆

平成十年四月二十六日
於 江東区亀戸天神社

二十韻「藤の下」 東 明雅 捌

藤の下余香を拝す祭かな	明雅
なで牛の背ののどらかな線	碧
銀斜面春山スキー盛りにて	将義
空ばかり描く画家のパレット	好子
居待月博多練酒酌み交し	娟
新蕎麦食うてさぼる論文	紀彦
細腰のお師匠さんの秋裕	義
ほのかに残る肌のぬくもり	義
ダイオキシンの知るか知らぬか狎の兒	理恵子
元素記号がノートびっしり	娟
さみだれの宿で贗札発行し	碧
菖蒲ふけよとご隠居が言ふ	娟
連立ちて蘇州市場へゆくつもり	碧
知らないふりではいるモーター	好
月凍り胸は赤々燃えてをり	義
八重奏はみんな驚鼻	娟
龍宮もカラオケ器材購入し	好
児らは終日缶蹴りに凝り	理
花の窓笑顔こぼれる車椅子	義
万国旗手に夢のメーデー	彦

平成十年四月二十六日 首尾
於 江東区亀戸天神社
連衆 松本碧 川名将義 矢部好子
八代娟 菅原紀彦 飯野理恵子

二十韻「藤の風」

浅賀淑代 捌

二十韻「吟声」

梅田利子 捌

二十韻「俳諧の」

倉本路子 捌

笙已むやにはかに藤の風立てり

舞ひ現れて消ゆ双つ蝶々

摩天楼ガラス磨きも日永にて

詩のひらめきは爪で書き付け

飛び級で進む少年小太りで

名探偵が化ける坊さん

夕月に青鷺佇てる静けさよ

核が来てから魚が棲まない

躁と鬱互ひちがひに想ひ病む

古今伝授の家に生まれて

大年の何事もなく埋み飯

タトルネックの覗く店先

手作りの人形妻が意志を持つ

三角にしか欲情はせぬ

犬連れたひとに会釈の月の道

いろいろの蟲入れた籠箱は

城の秋ボジョレヌーボー積み出され

マグリット描く碧き虚空に

花が散る夢の破片のごとく散る

一輪車にてめぐる春山

平成十年四月二十六日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 原田千町 椿紀子 佛淵健悟

田村満子 井上鶴鳴

吟声に揺れて答ふる藤の房

春を惜しみつ渡る朱の橋

上り築石といふ石濡るるらむ

二階座敷の開け放ちたる

月白の彫刻めきしエトランゼ

醤油芳んばし唐黍を食む

付文を時代祭りの袖に入れ

女盛りの夫居ぬ間を

み仏の御手に水掻き拝しけり

インド、ネパール、バスで乗り継ぐ

草原を忽ち過ぎし夏の雨

午睡の村長目覚めたる月

ダイレクトメールばかりが高ばりて

みんな預金に廻る減税

割り切ったはずのふたりの冬襖

炬燵の中の足がもの言ひ

鬼婆が居ってなせ居ぬ鬼爺

同窓集ひ並ぶとっくり

散る花に埴輪の笑みのほころびぬ

佐保姫の裾靡く青垣

平成十年四月二十六日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 吉村あみこ 宮内志乃 古賀一郎

中田あかり 梶井時子

俳諧の古式床しや藤祭

亀住む池を渡る春風

青ぬたを白き小鉢に取り分けて

繰り返し弾くシャコンヌの曲

寒月の武満ホール映し出し

ふたり寄添ふ底冷の街

後手にすばやく渡す部屋の鍵

秘宝のありか示す偶像

コンドルの羽ばたく影を見上げつつ

百八十度子午線を過ぐ

酒好きは口が迎へに来るとかや

子供が噎せる麩の菓子

痴話喧嘩犬は女房に味方して

夜叉の姿をそっとカメラに

名刹の伽藍はるかに望の月

旅芸人の草虱つけ

留学生のコレクトコール秋深み

ジョクジャカルタの踊夢見る

山道を登りのぼりて花大樹

雑飾れる落人の里

平成十年四月二十六日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 吉澤蘭石 山崎一恵 諏訪欣二

佐古英子 秋山志世子 上月淳子

二十韻「御社の」

近藤守男 捌

二十韻「藤の房」

佐藤世止彌 捌

二十韻「時充ちて」

鈴木美奈子 捌

御社の藤より明くる日和かな

守男

藤の房下へ下へと咲き誇り

世止彌

藤蔭に佇てばたゆたふ時充ちて

美奈子

巢代を選ぶ池の燕

黍穂

夏はもうすぐ太鼓打つ音

英二

密吸ふ蛇のひそやかな音

久美子

春障子新居にやうやう慣れてきて

蓉子

干鰯切る竈の大鍋煮立ゝせて

孝子

パパ得意遠足弁当作るらん

順子

珈琲豆をゆっくりと挽く

麻子

郵便配達ちよつと冗談

道子

マニユアル通り模型飛行機

達子

月今宵ハープ弾く手のしなやかに

シズ

超高層ビルのおはひに出づる月

郁子

月涼し森の向ふに何かある

弥生

コスモス街道バイク相乗り

同

邯鄲を聞く会に入れり

文子

伯爵夫人白き裸足で

真呂

蜻蛉追ふその昔より君が好き

麻

名乗らずに酌み合ふ仲の爽やかに

孝

アイニード・アイウォンチュウと抱きしめ

順

木目さまさま工房の留守

穂

欲求不満勘定に足す

同

右往左往の党の再編

美

両首脳笑顔で腹を探り合ひ

ズ

馬塗りのクライスラーを送り出し

二

軽い子がてっぺんに乗る組体操

生

紅旗征戎わがことでなし

蓉

ダーニング・テン番人の笑

郁

下社奉納御柱たつ

美

外国の麦酒の味をあれこれと

麻

蜘蛛の子を散らすが悪童連

道

雪しんしん婆は語部カセットに

達

印度の牛は養老院へ

穂

お化け話に烈し雷鳴

文

腹八分目風邪もひかない

呂

コンピューター次世代娯楽配合す

蓉

このところ寂聴源氏読み耽り

郁

虫喰の有機野菜の貸農園

順

心療内科に美人また来る

麻

夫の行方を人に追はせる

二

寂聴源氏灯火親しむ

美

憂国忌月も凍てたる金閣寺

蓉

目張りした六畳間でもふたりなら

道

挑み来る女上司は月の怪

呂

かやく御飯に偲ぶ故郷

男

達磨忌の月山奥の寺

文

イミテーションの胸のやゝ寒

達

兄弟はさみ将棋を楽しみて

ズ

新世紀夢も希望も打ち棄てて

彌

青銅の仮面王国四川省

奈

ポケモンテレビ遅き解禁

蓉

バンジージャンプ背を押されつ

孝

夢ばかりみる虎箱にゐて

美

花あかり轆轤の音に通ふ夢

穂

野の川を小鷺の渡る花筏

同

市長殿こなたに入らせ花筵

達

同じ仲間で行く磯開

麻

稲荷の幡を揺らす春風

郁

タンカーよぎる海のうらゝか

生

平成十年四月二十六日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 近藤守男 浅野黍穂 五味蓉子

内田麻子 小野シズ

平成十年四月二十六日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 佐藤世止彌 日高英二 坂本孝子

加藤道子 東郁子 橋文子

平成十年四月二十六日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 副島久美子 和田順子 篠原達子

本田弥生 木村真呂

二十韻「藤影ゆらく」 中野 昌子 捌

二十韻「藤まつり」 村田 富美 捌

二十韻「藤の香」 山口 美恵 捌

鯉の尾に藤影ゆらく池面かな 昌子

東風に届けと願ふ絵馬板 悟乃

マンションは雛も小ぶり揃へるて 和子

子の背の伸びは誰に似たやら 志げ子

ぴったりの水着でしゃなり宵の月 美代子

天牛虫に咬まれたと言ふ 和

留守電に暫く逢へぬメッセージ 乃

塀の中なり社長官僚 げ

分別をやかましくして省資源 代

剥げた塗り皿猫に押し付け 乃

お十夜の鉦はお婆々にまかせきり げ

トランペットも冬の自主トレ 和

相乗りでロッキ―越えるツーリング 代

色で仕上げて切れてうそ寒 和

更待の月まで酌まん吟醸酒 げ

案山子歩くと言ふいごっそう 昌

故郷は新幹線からちと外れ 和

母校創立募る寄付金 乃

大地震に裂けて尚咲く花を愛で 代

ゴールデンウィーク今日でお終ひ げ

平成十年四月二十六日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 山下悟乃 式田和子 蒲原志げ子

山田美代子

撫牛の鼻先光る藤まつり 富美

春をしみつつすぎし反橋 清子

子供らも団扇作りに精だして 弘子

貼り損ねたる右手左手 哲

箱釣りの月も一氣に掬ひ取り 凡

バンガローにて彼と落ち合ふ 千寿子

ボルドーのやや辛口の恋仲に 洋子

鞆一ぱい偽の銘柄 清

有給も使ひはたして残業し 寿

焼き芋売りの声のちかづく 弘

振り向きしその瞬間の鎌鼬 凡

洗濯ものが軒にひらひら 清

宰相の公約いつか反古になり 美

バツ二同志のさはやかな宴 洋

月今宵抱けば骨のなきごとく 清

虫籠さげて鳴らす塗り下駄 寿

故郷の父母しのぶ縁の先 弘

アガサクリステイ読み耽る椅子 洋

花開くいふべき言葉絶えしまま 哲

遠霞して越の山々 寿

平成十年四月二十六日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 下鉢清子 市野沢弘子 中川哲

中川凡 紺野千寿子 大島洋子

藤の香や天神様の奥処まで 美恵

撫牛に触れ春惜しむ頃 政志

耕耘機エンジン軽く馳るならん 瑞枝

片ゑくぼの兎背にゆりあげ 玲

月光の縁に出て読む「かぐや姫」 佐紀子

二人して売る七夕の竹 澄子

パチプロの妻の厨のそぞろ寒 玲

資源ゴミにはボトルさまさま 枝

筑波山葎切の声こだまして 子

写経はかどる夏籠りの堂 枝

流行のマイカー自慢とくとくと 玲

そのこのベンチはペンキ塗り立て 子

鮮やかに古墳の美女を写し出し 紀

伊達の薄着で彼に寄り添ふ 同

哀しみのアリア切々凍てる月 子

肴も要らぬ辛口の酒 志

生涯を次席に終り父寡黙 志

鳴門の渦をまたぐ大橋 枝

掌の胡蝶放てば花に消え 志

未来に夢を託す初雛 玲

平成十年四月二十六日 首尾

於 亀戸天神社

連衆 峯田政志 大窪瑞枝 日高玲

八角澄子 間佐紀子

「田一枚植て・・・」の謎(3) 日高英二

この句についてまるでクイズのようなことを言ってきたが、ここで卑見を述べて皆さんの批判を求めたいと思う。私は山本健吉氏の見事な分析も含めて基本的には②の解に従う。しかし、それだけでは私にはなお不満が残る。これがもし敬愛する西行への挨拶とするならば、これでは軽すぎる気がし、胸に感動が湧かないからである。だがある時ふと思いつくことがあり、それを契機にファンタジーが膨れ上がり、私なりに満足できる一解のパーズベクティブを得ることができた。そのファンタジーを述べてみよう・・・。

・ 道の辺の清水流るる柳蔭

しばしとてこそ立止まりつれ

・ 田一枚植て立去る柳かな

一二つの詩を改めて並べて眺めて見ると、「柳かな」はマンネリズムなどではなく、西行追慕への深い詠嘆が籠められており、あきらかに詩想の軸をなしている。そしてその詠嘆の深さに呼応するように「田一枚植て」という措辞が、なにか重く生々しい力をもって迫ってくる。そうなのだと思う。芭蕉はここで、閑かで鄙びた田園風景などを挿んでいるのではなく、西行の仏教的無常を背景にした純粋な生命の抒情に対し、俳諧師として、生活の詩人として、「田植」という現実の重みをたっぷりと持った農作業そのものを差し出

しているのだと思う。

昨年発見された真跡「奥の細道」の最初の句案が示唆しているように、芭蕉たちが柳の下に辿り着いた時は田植の最中で、しかもそれは目前で行われていたと思われるのである。当時の田植は一般的には農村のユヒの共同作業で、早苗を運んで田に投げるのは男の役目、田植歌を唄いながら植えていくのは早乙女たちの仕事であった。それは泥田の中を這い回る辛い労働であるとともに、村娘たちが出揃って賑やかな、エロチシズムさえ漂う晴れの行事であった。芭蕉が一枚の田植が終わるまで目前に眺めていたのは正にこのような農民の行為であり、それに共感を覚えつつ、その全体を西行に差出しているのだ。『ごらんなさい、これが私たちの詩の世界です。あなたに逝かれてから五百年、その間日本の詩はあなたたちが歌われた「あわれ」の世界から、寂び々々とした幽玄の世界を経て、今や庶民の世態人情までも歌い込む俳諧の世界へと変貌したのです。私はこの道をさらに進んで行きます。私は俳諧と抒情の大総合を夢見ているのです。それはうまく行くでしょう。私はあなたの中にもそのための大きな拠り所を見出しているのですから。だから私は敬愛と感謝の気持を籠めてこの句をあなたに捧げ、ここを立ち去りたいと思うのです」。私のファンタジーによればおおよそこんな挨拶心がこの句の中には籠められているのであって、そう解

釈することによって私の天の邪鬼も鎮まったのである。

しかし事実はそのように進んでゆくのである。時は正に田植の時節、芭蕉たちはなお日々繁忙期の農民の生活を目のあたりにしながら白河の関を越える。そして須賀川で巻いた歌仙の一卷、

風流の初や奥の田植歌

翁

覆盆子を折て我まうけ草

等窮

水せきて昼寝の石やなをすらん

曾良

籬に鯁の声生かす也

翁

一葉して月に益なき川柳

窮

雇に屋根ふく村ぞ秋なる

良

これはその表六句だが、ここに展開されている農村生活の爽やかな把握はどうだろう。誰かが田園交響楽のようだと言評していたが、私もまったく同感である。(応仁二年宗祇が興行した「白河百韻」と是非比較してみられたい)。こうして「奥の細道」の後、農民の生活はもはや「心なき賤の生業」ではなく、地上の人間の生活として随所に懐かしい詩情をもって描かれるのである。

「市中は」

二番草取りも果さず穂に出て

去来

灰うちたたくうるめ一枚

凡兆

「蠅ならば」

夕まぐれ煙管おとして立帰り

去来

泥うちかはす早乙女のざれ

芭蕉

(以下例句略す)

(了)

英語連句の試み 花鳥風月(6)

浅賀淑代

梅雨明けも間近。前号にスタートした二十韻にアメリカから付句が届いております。

脇起 二十韻「ねこの子」の巻

ねこの子のくんづぼぐれつ胡蝶哉 其角

土筆むくむく生ふる中庭 ゑみこ

暮れかぬる釣橋渡る自転車に フェイ

酒場でダーツの挑戦を受け アリス

前回はここまで。表が終わりました。裏の

折立は、峯田政志さんにお願ひしました。

ブルースの洩れくる秋の赤煉瓦 政志

(the blues

leaking through

the autumn red brick wall

フェイ青柳訳)

赤煉瓦はまさに秋色。取り合わせが利いて
いますね。この句に続けて、ウ2、3、そろ
そろ恋・月を、という注文に、サンフランシ
スコの俳友達が応えてくださり、二句。

(A) first frost in the grass

she reaches for my hand Alex

(露霜の野に僕の手を取りアレックス)

晩秋の季語first frost(秋霜・露霜)がい
いですね。秋の淡くて消えやすい霜が、僕の
手を取る女性の風情も連想させ叙情的な恋句
です。次に、月の句が出しやすいうようにとの

配慮もうかがえます。

(B) the two of them picking grapes

eating, touching--a stolen kiss

Patricia

(二人は葡萄を抓む口づけ パトリシア)

葡萄と口づけの取り合わせ。俳句で培われ
た仕立てのよさが見えますね。が、平句では
できれば「切れ」てしまわない表現がのぞま
しく、また短句にしてはすこし長いようです。
省くことのできる言葉もありそうですね。そ
れにしても楽しい恋句です。俳諧があります。
パトリシアさんの句(B)を一直させて頂き、
葡萄を抓むやうにキスして

裏の3句目、月・恋の句に進みます。

3 moonlight

and chill] air

on our nakedness Jerry

(月光にふたりの肌の冷まじくジェリー)

ベタ付けではないか、また「」では「冬
っぽい」のでは? とお便りに添えられてい
ますが、前句をよく受けながら、景は広がっ
ています。また、前にも(二九号)触れまし
たが、chill/chillyは晩秋の季語と取っても
よいのではないのでしょうか。nakedness(裸
夏の季語)も、この場合、気になりません
ね。おもしろく展開してきました。

2 葡萄を抓むやうにキスして パトリシア

3 月光にふたりの肌の冷まじく ジェリー

では、裏四句目をどなたかお願い致します。

* 連句と酒 *

「居酒屋」

蒲原 志げ子

出入りの酒屋は、元商社マン。親父
亡き後、脱サラ。稼業も何とか持ち堪
え、美人の妻に子が二人、背広からジ
ーパン姿で『毎度・』と重いビールケ
ースを運んでいる。店を閉めると彼は
必ず通い慣れた赤提灯へ出かける。家
には、選りどり見どりの名酒があり、
愛想の良い女房が居ながらである。

店は無愛想な亭主。最小限にしか口
を利かないけれど彼の定席はちゃんと
明けて待って居るらしい。肴もありき
たり。仲間も滅多に連れて行かない。

彼は孤独の酒を飲みに行く。客の騒
ぎも我関せず。場面がややこしくなる
と亭主は目顔で帰りを促すような。銚
子二本をゆっくり飲んで帰る。

『その人、兆次って名じゃないの?』
『残念でした。典型的な居酒屋亭主』
人にはそれぞれ酒境というのが在る
そうなので、心に問い心に語る貴方の酒境
は?

榎や花なき蝶の世捨て酒 翁

◇猫養会案内

▽猫養会 江東区芭蕉記念館

日時 十月二十一日 一時〜

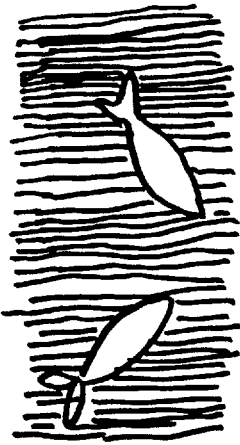
正式俳諧の後二十韻興行

▽連句誌創刊

この春市野沢弘子さんが連句誌『点』を創刊されました。「久慈庵連句塾」など、意欲的な取り組みの今後が楽しみです。

東明雅先生の「芭蕉俳諧の鑑賞」ももう一度読むことが出来ます（『季刊連句』よりの転載）。季刊一部七〇〇円。

前号原田千町さんの庵号を「卧猫庵」とご紹介しましたが、「卧」は「臥」でした。お詫びして訂正致します。



中島啓世 哀悼

杉内 徒司

近藤蕉肝氏から今年の心敬忌に「心敬五百回忌顛末」の話を依頼された。

心敬忌は昭和四九年四月二一日、五十年五月二五日の二回は私が興行したが、その後四年間は中絶。五五年四月二十日、五六年四月十九日、五七年四月十八日の三回は、中島啓世、武田政市の二人が中心となり復興した歴史を持つ。

啓世さんの亡くなられたのを知ったのは今年の心敬忌（四月二六日）の前日だった。啓世さんが義仲寺連句会（於関口芭蕉庵）に初めて参加されたのは五三年十二月十日の例会だから、二十余年の付合になる。以下心落ち着かぬまま思い出を書いてみる。

時は冬身は風葉の成田立ち
を発句とする啓世さんの独吟歌仙（昭和五

三年十一月二十日 首尾）が『杏花村』（五四年三月号）に載っていて、一去る十一月小学生の頃から一番の愛読書『ギリシャ神話』の国とトルコはイスタンブールへ行き、かねてより岡田利兵衛先生からお教えいただいた歌仙に思い出をまとめてみましたという短文が添えられている。

昭和四六年十一月から始めた義仲寺連句会はその頃高踏的になりすぎたので、別に初心

者向きの連句教室を設け、五四年二月から翌年十月まで開催したが、啓世さんは全回参加され、旅の付句で楽しませてくれた。

登りきてすみれ小さし賤ヶ岳
俱利伽羅は平家の陣の八重の花
木天蓼の葉白かりし飛驒の夏

不破の関産婦人科の庭先に
日没を見んと白夜の湖畔にて

ドミノする部屋に落花の吹きこんで
船津屋で歌行灯の謡きく

十符の管跡方もなく蛇苺
石の巻直哉の生家細格子

紙くずになりし札束ブノンペン
蠟座のアンタレスのみ尾はいづこ

桂林の月は南画の山の月
姫川は翠の水にうつる月

業平は十三峠逃げ帰へり
もうつかれたと泣きし鳴き竜

いかなご釘煮はるはるとつく
手弁当にはくにもままかり

啓世さんはこの連句教室で熱心に勉強され、幹事としてもよくお世話して下さいました。

後年、平成元年六月から十二回開催した大磯の嶋立庵連句会でもよき世話人であった。

啓世さんとの二十余年をふり返ってみると、一見派手型だが裏方に徹する面もあり、小さなグループを育てるセンスのある得難い方だった。

【Q】 最近、他の結社の方と一座する機会も増えてきましたが、他流の方と巻く時の心得といったものなどありましたらお教えください。

【A】 他門と一座する時の心得と言ってもそれにはマナーとメソッドの二つの面があると思います。まず、マナーの面では同門と一座する時のマナーと変わったところはありませぬ。

例の「俳諧無言抄」(延宝二年刊)の「一座の法」(「連句辞典」七頁参照)は、俳諧の時代のものだけに、現代的でない所も多いのですが、人と和し文事を楽しむ事を主眼とする点では同じで、今日の連句の席でも参考になる所が多いのです。

それ故、他門の人を交えた一座では、一門同志の時よりも一層マナーを大切に、一門を代表するつもりで行動して欲しいと思います。次にメソッドに関してですが、これははっきり言えば、式目運用の方法であります。猫

養会には猫養会の式目(「猫養通信」第二十一号所載)があって、皆さんも大体それに準拠して作品を巻いておられるのですが、他門にもそれぞれの式目があって、必ずしも全国的に統一したものはないのが実情です。これは確かに不都合ですが、一面から言う

と、連句とは、誰がどのような式目を使って作ろうが自由であり、そこに連句を作る楽しみもあるのですから、それを無視して、全国共通の式目を細かな点まで急速に決めようという動きには同調できないのであります。猫養会式目の中、問題となるものを左に列挙してみますと、

一、 人情自、人情他、人情自他半、人情無(場)の各打越および縞を嫌う。

二、 片仮名・アルファベット・数字の打越を嫌う。

三、 体言止めまたは用言止めの五連続を嫌う。

四、 挙句は発句に返らぬように特に注意する。

五、 短句下七の四三及び二五を嫌う。

などが主たるものであります。右の五点は猫養連句の伝統があり、また、それなりの理由があって出来たもので、それだけに会の中ではきちんと守られておりますが、他門では異論のあるところもあり、また、無視されているところもあります。

それ故に、他門の方の捌きを受ける場合はその捌きのやり方に従い、衆議判の席でも、猫養流を強調して、一座の掣燈を買わぬよう注意して下さい。

その一座で自分が捌く役になっても、右にのべた五点には注意して、一座の理解と納得のもとに捌かれるようお願い致します。

◇ 猫養発展基金ご協力有難うございます。

一口 明坂英二 フェイ・青柳

一万円 大窪瑞枝 未来図連句会

金葉会(篠原達子) 安藤正一

二万円 原田千町

(敬称略)

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店
普通3376045 猫養基金

..... § §
あとがき

○ 梅雨明言はどなたがどうやって出すのでしょうか。儀式めいたものさえ感ずる、気象庁の「奥の院」でのその厳粛な瞬間を想像するのは面白い。

○ エルニーニョ現象という言葉覚えてから今度はラニーニャ現象である。スペイン語で女の子という意味らしい。お天気も予報との追っかっこを楽しんでいるのだろうか。

健康第一に、ご健吟下さい。

季刊 「ねこみの通信」第三十二号

発行者 猫養連句会

編集人 二一九五 町田市金井6-7-16
1007110

佛淵健悟

印刷所 アトリエ・Neko